



# 大月の名所をめぐる小さな旅 岩殿城跡を歩いてみよう

岩殿山の標高は 634mで、けっして高い山ではありませんが、南面上部に聳える「鏡岩」とよばれる巨大な岩壁が威容を誇っています。

この岩壁は、500 万年以上も前、この周辺がまだ海面下だったところに堆積した礫が固結し、その後の造山運動によって隆起したものです。この礫岩の下には、さらに古い時代の海底火山の噴出物である凝灰岩や安山岩があり、軟らかい凝灰岩と上に乗っている礫岩との境には多くの洞窟が形成されています。



岩殿山の険しく起伏にとんだ地形は、山岳信仰と結びつき、心身を鍛錬し験力を得るための修行の場にふさわしく、平安時代の頃に修験道寺院の円通寺が開かれると、郡内修験道の聖地として栄えました。

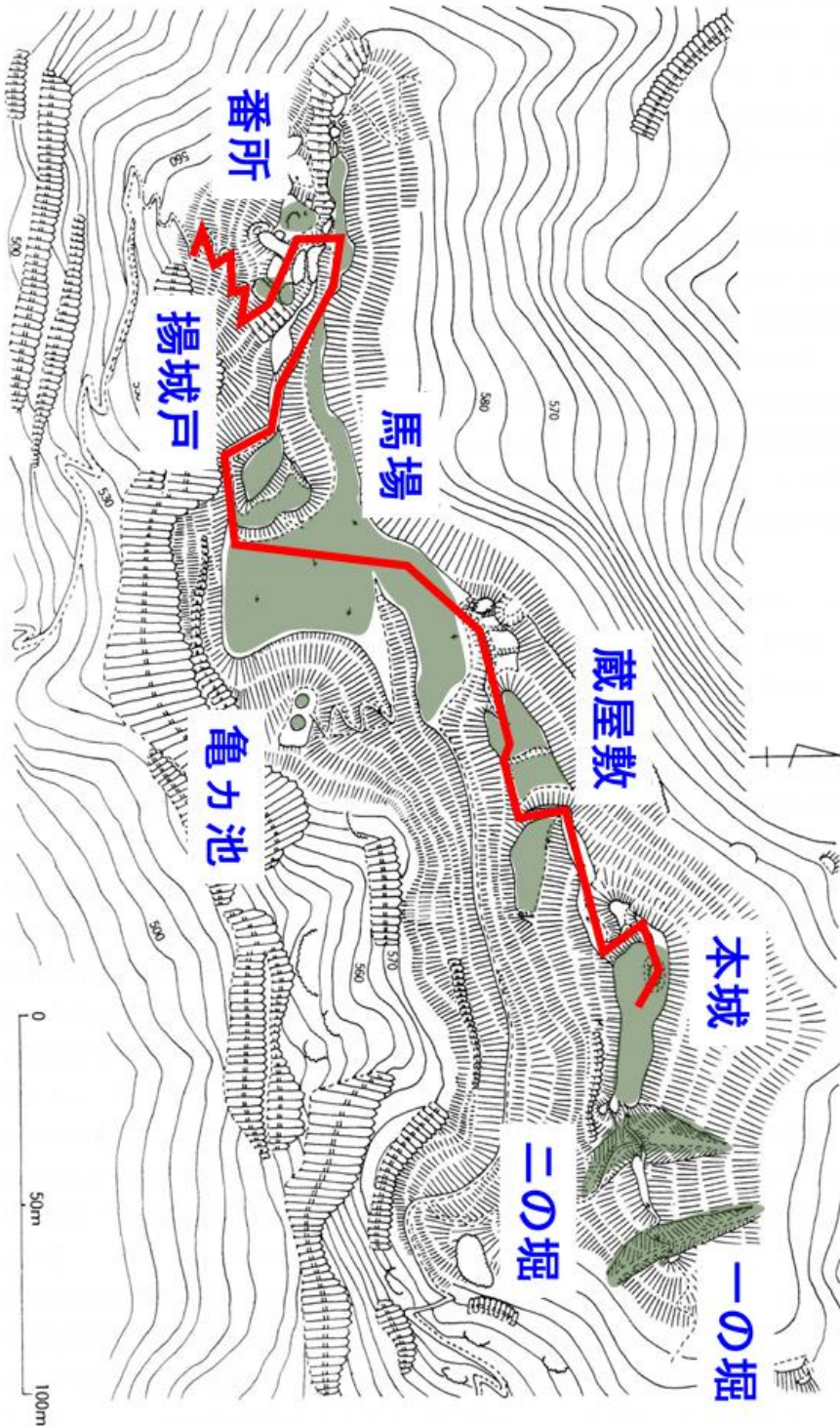
16 世紀の戦国時代になると、その険しい山容と東は相模・武蔵、南は駿河、北は秩父、西は甲斐国中地方へと通じる要所に位置することから城が築されましたが、いつ誰が築いたかについては諸説があり、現在のところ定説はありません。

『甲陽軍鑑』では、駿河（静岡県）の久能城、上野（群馬県）の岩櫃城と並んで、三名城の一つに数えられていますが、『軍鑑』で言う「名城」とは要害堅固という意味であること、しかも武田家支配の範囲内でのことであることに注意が必要です。

また、『甲斐国志』（1814）には山頂部の地名として、「岩殿権現ノ祠」「一ノ堀」「二ノ堀」「本城」「馬場」「大門口」「蔵屋敷」「亀カ池」「揚木戸門」「花見カ窪」などが挙げられていますが、遺構として存在が確認できるものは2つの壕（一ノ堀・二ノ堀）と湧水池（亀カ池）のみで、他は地形や伝承により比定されているにすぎません。

また、「番所跡」「馬屋」「烽火台」「本丸跡」「二ノ丸」「三ノ丸」「兵舎」「物見台」「大手門」など、資料にもない地名の標識や説明版が観光目的のために立てられています。

1995（平成7）年6月22日、「岩殿城跡」として山梨県の文化財に指定されました。



岩殿城縄張り図（岩殿山山頂）



## ■岩殿城跡説明 名称および「 」内の文は山頂の説明板による

### ○揚城戸跡

「第二の関門とよばれ、巨大な自然石を利用して城門をきずいていた。」

鏡岩の崩落のために現在通行止めとなっているふれあいの館からの登山道と浅利地区からの登山道との合流点から40mほど登ると、道は大きな二つの岩の間をすり抜けるようにして頂上へと続いています。かつてはここに上下に開閉する門があり、敵兵を迎え撃つ役割を担っていたと考えられています。

### ○番所跡

「雨、露をさけるための建物があり、揚城戸の番兵の詰所であった。」

揚城戸跡を進むと頂上手前左側に小さく平らな場所があります。ここは、揚城戸を守る城兵の待機場所兼物見台があったと番所跡とされています。登山道はここでほぼ直角に曲がって山頂に進む枳形虎口となっているため、岩殿城に攻め寄せる敵兵に対して横矢をかけられる場所としても利用されたと考えられます。

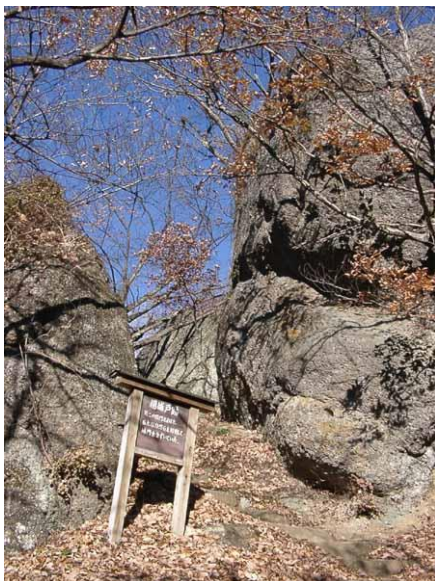
### ○物見台または修験場

番所跡をぬけて尾根を左に折れると、西方に大きく開けた場所に出ます。「この頂部西端には礫岩の大露頭がみられた。史実として記録はないが、岩殿城の西の物見台ともいわれた。あるいは円通寺で研修する修験者の修行場ともいわれた岩であった。しかし、長い年月の間に風化・浸食が進み、崩落の危険性が増大したため、頂部から高さ約8m下方まで（約300㎡）破碎撤去工事を施工し、平成11年3月完了した。」

### ○郭跡

西の物見台跡から山頂部の東方向に向かって細長く削られた平らな地面が続きます。郭跡と考えられている場所で、右手の南側は削り残して土塁状にし、攻め寄せた敵兵の侵入路を狭めると同時に揚城戸から直接に攻撃されることを防いでいます。

右手の良く整備された土塁上の鏡岩上部のほぼ中央あたりには、乃木希典陸軍大将の詩碑と屋根を四方にふきおろした柱だけの小屋があります。



### ○馬場跡

「本城内で一番広い面積を有し、馬や兵士の訓練場とされ非常にそなえた。」

細長い郭跡を抜けると馬場跡という山頂部で最も広い面積を占める場所に出ます。武器弾薬や食料を蓄えた場所とされますが、城兵の住まいもここに設けられたと考えられます。

### ○倉屋敷跡

「武器や弾薬、食糧、燃料のほか生活用品などの保管がされた。」

### ○本丸跡

「三箇所にある物見台を総合した本陣で防衛や進攻の指令を発した。」  
本丸付近の発掘調査では柱跡、礎石、茶壺、陶器片などが出土しています。

### ○烽火台跡

本丸跡から一段高い場所にあったと考えられます。

### ○空湟跡

「本丸の東側から進入する敵にそなえ、また日常の生活通路として利用した。」  
本丸跡の東北側斜面には二つの堀切があり、尾根伝いの敵兵の侵入を阻んでいます。

### ○用水池

「上の池を亀ヶ池とよび飲用に、下の池を馬洗池とよび馬や兵士の水浴用とした。」

馬場跡から南につづら折りに下りた所に今も水が湧く二つの井戸があります。

『甲斐国志』には「池ニツ常ニ水ヲ湛エテ干天ニモ不涸亀ヶ池ト名ツクーハ用水一ハ馬洗水ナリト云伝フ」とあり、二つの池をあわせて「亀ヶ池」と言っていますが、いつのころからか別々の名称でよばれるようになりました。



本丸・烽火台跡から富士山を望む

